

発行日 平成19年12月15日

編集 愛知県立芸術大学 広報委員会

編集責任: 森田義之

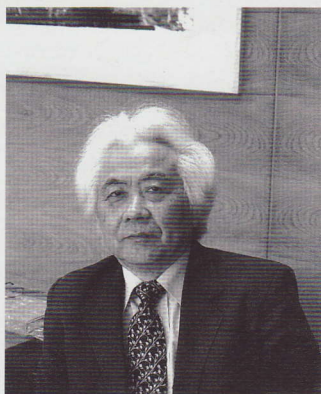
発行 愛知県立芸術大学 事務局 総務課

愛知県愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峯1-114

TEL 0561-62-1180 FAX 0561-62-0083

Home Page <http://www.aichi-fam-u.ac.jp/>

No.55



学長 磯見輝夫

“ひらかれた大学”をめざして

愛知県の公立大学法人は、県立大学、県立看護大学、そして県立芸術大学の三校を経営します。これまでは県が直接大学に交付金を出し、それを大学が運用していくことで大学の経営がなされていましたが、これからは県から法人に交付金が下り、それを大学の運営に充てるとようになります。大学は法人との協力でその運営をしていくことになり、その協力体制が重要になります。

今年度からキャンパスの改築計画がスタートしましたが、これも法人と緊密に協力しながら愛知県立芸大の未来を見据えた環境をつくることを目指します。

法人化によって六年間を周期とした大学の目標が定められますが、それを達成することが法人化に関わる大きな課題です。その目標の一つに社会に“ひらかれた大学”を目指すということがあります。大学の中にだけ閉じこもらない大学という意味です。そのため社会との接点をどう持つかを考え、実行していかなければなりません。今年度から愛知芸術文化センターで行われている「サテライト講座」のように大学が外に出て行く方法。奏楽堂で行われる演奏会などのように大学に人を呼ぶ方法。こうしたことを積極的に行うことが必要です。今までにない試みが次々と行われ、大学に活気が生まれることを期待します。

さいわい芸術は、音楽にしても美術にしても、聴く人、見る人が必要です。美術作品は見られること、あるいは使われることで完成しますし、また音楽も聴く人を持たないわけにはいきません。創作や演奏は個人的なものです、人とのつながりを最も必要とするものでもあります。

こうした活動が盛んになると愛知県立芸術大学の名前が世に知られるようになります。大学としてはこれが一つの企みでもあります。その名前が知られ注目されるようになると、それだけ大学の存在が認知され大学の将来につながるからです。

目次

学長より	01
特集1 芸大法人化スタート	02~05
特集2 新任教員紹介	06~07
芸大生フォーラム	08
卒業生コラム	09
トピックス	10~12
大学日誌	12
展覧会・演奏会日程	12

12

2007

芸大法人化スタート

特集 1

“素晴らしい大学”づくりに向けて — 愛知芸大の皆さんへのメッセージ

愛知県公立大学法人理事長 清水哲太



皆さんこんにちは、理事長の清水です。

日本の大学は、今、新しい方向へどんどん進んでいると思います。それはどうしてかと考えると、自主運営といいますが、運営を自分の責任でやることにより、改革や改善を早期に実現していかなければならないという時代的な要請からきています。つまり、新しい方向への進化が求められているということだと思うのです。それで愛知県もご他聞にもれず、大学法人をつくったわけです。

そこで結局、この法人をつくって何をするのか、何のために法人をつくるのかということが重要なのです。それはやはり“いい大学”をつくり上げるという話ではないかと思います。ややもすると「経費削減」とか「お金を少なくして済むように、合理化のためにつくるのだ」とか、そういう理解が先行しがちであるかと思うのですが、本来そういうことじゃなくて、本当に持っているリソースというか資源を有効に使って、“いい大学”を創っていく。こういうことにやるのに、どっちがやりやすいかという判断に基づいたのだと、私は理解しているのです。

結局、“いい大学”を創る、愛知県立芸術大学を素晴らしい大学にしていきたい、そういうことです。前学長の島田先生も、少し前に「40年の歴史で、これまでのレベルを創り上げたというのは、それはそれなりにかなり評価できるのではないか」ということを言っておられました。私も率直にそのように思っている訳ですが、でも、進歩には限りが無いものでして、「今こういうレベルになったからもうこれでいい」ということではなくて、「ここまでできたら更に次の40年、50年にはもっとすごい大学、もっといい大学にしていこう」、こういうふうに考えるのが当然であるし、それがまた私どもの責務だと考えております。

これから学長先生、先生の皆さん、事務局の皆さん方と協力しながら、できるだけいい大学を早くつくらないといけない、そういうことに尽力していきたいと思っております。

では“いい大学”とはいったい何なのだと考えますと、以下に述べますのは私（あまり大学について知識も経験も無い者）の考えでございますので、先生方の方が、私なんかよりずっと“いい大学”に対する思いがおりで、すでにビジョンみたいなものが先行しているのではないかと考えております。

まあ、そういった意味から先生方の考え、いい大学に対するモデルみたいなものを出して頂けたらと思うのですが。

結局、私は「いい大学とは何か」というと、まず優秀な資質を持ったいい学生が集まってくる、そういう大学だと思うのです。そしていい資質を持った学生が集まってきたら、大学の中で彼らを更に鍛え上げる、これには先生方の創作活動や研究が非常に関係してくるわけです。それと指導・教育ということです。いい人材を集めてきて、この大学に入れて素晴らしい研究と素晴らしい指導で、もっとその人たちの資質を上げていく、そういう実践が出来る場があるということ、そうするところから出て行くのは全く素晴らしい人材だということになります。100人が100人（全部が全部）、素晴らしい人材に育つというのはありえないかも知れませんが、そういう人たちが如何にここから沢山出て行くかということ、つまり他の大学に比較して圧倒的に多くの優秀な人材を輩出する学校、それが私の考える本当に“いい大学”だと、言いかえれば“いい大学”とはそういうものだと思っております。

そういう意味で今まで先生方がずっと築き上げてこられました40年の歴史というものは、非常に重いものがある、こんなふうに感謝しております。じゃあ今言いましたように、いい学生が沢山集まってきて、中で素晴らしい教育が行われ、素晴らしい人材として輩出される、これがいい大学の姿であるとするなら、それには、色んなことが沢山関わってきて、それぞれが有機的に機能する大学ということになると思うのです。

それには、大学として、「その大学が本当に何十年後にこんな大学を目指す、こんな素晴らしい大学になる」というビジョンが、やはりどうしても必要だと思っております。

結局、ビジョンを持つということ、ビジョンをつくり上げていくということにかかっていると思います。

このビジョンをつくり上げたら、次は毎年毎年、ビジョン達成に向かって適切な方策を実践し、それに合ったように大学を運営していかなければならないという事です。

ではビジョン達成のあかつきには、どうなっていなければならないかと言いますと、他に無い凛とした特色を持ったものでなければならないと思います。たとえば日本に5校ある国公立の芸術大学の中で、愛知県立芸術大学は“あんな大学だよね”と誰もが認めるそんな際立った特色をこの大学が持つ、そういうことだと思います。そこで、まず先生方にはビジョン作りにご尽力頂きたいわけですが、法人も法人として、できるだけ努力をしまいたいと思っております。是非、一緒になって大きなビジョンを立てて、それに向かって年々努力して行きましょう。こういうことが実現されていく過程で素晴らしい大学という評価が定着し、優秀な人材がいっぱい集まってくる。それでまたその環境の中から、更に磨きのかかった優秀な人材が輩出されていく。こういう循環を創り上げていかなければならないと思うのです。

そのためには、やはり限られたリソースをいかに上手く使うかといふ方の話もよくよく考えていく必要があると思います。つまり限りあるリソースをいかに効率的に使って、大きなビジョンを実現させていくかという、このところが大学でも運営の要諦だというふうに私は考えております。

そういう意味では是非先生方にもお願いしたいわけですが、限られたリソースを如何に重点配分、効果的に使って、日本一の特色ある大学にするか、この様な考えでご尽力を頂きたいと思っております。

私ども法人、事務局も、先生方と一緒に、先程から申し上げております“素晴らしい大学”づくりに努力していくつもりでおります。是非、一緒になって輝かしいゴールを目指していきましょう。私は県大の中に私の部屋を用意して頂いております。そのドアは、いつも開けてあります。どなたが何時に飛び込んで来て頂いても、結構でありますので、是非、皆さんお気軽にどうか、「ちょっと理事長、こんな話をしておきたい、こんなことを聞きたい」というふうに思われた時には、どうぞお越しください。

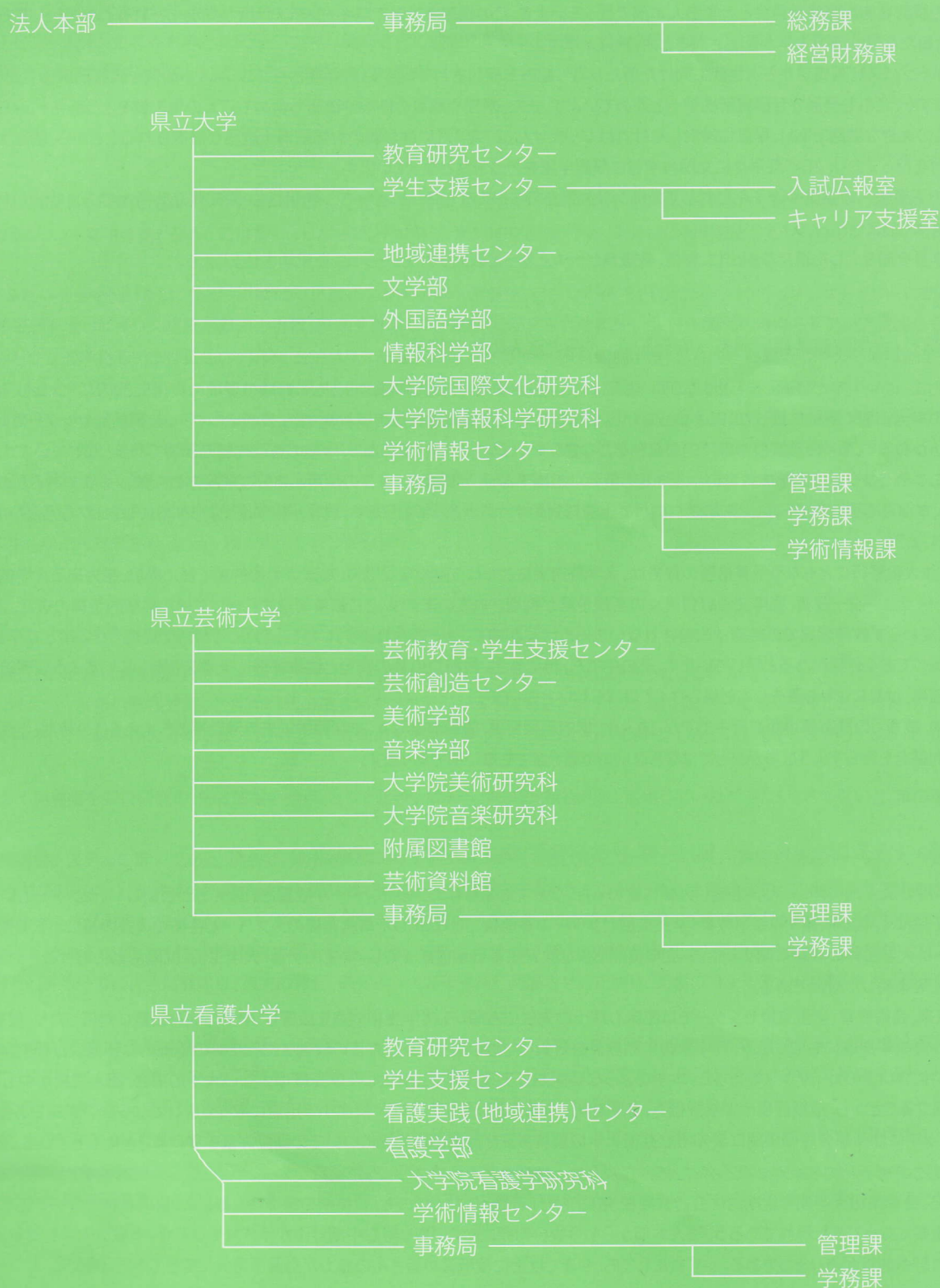
どうぞ、宜しくお願いします。

愛知県公立大学法人 役員一覧表

理事長	清水哲太
副理事長(兼県立大学長)	佐々木雄太
副理事長(兼県立芸術大学長)	磯見輝夫
副理事長(兼県立看護大学長)	川田智恵子

理事(兼法人本部事務局長)	山川利治
理事(名古屋大学理事・副総長)	佐分晴夫
理事(東邦ガス株式会社代表取締役社長)	水野耕太郎
監事(弁護士)	齋藤勉
監事(税理士)	加藤純利

愛知県公立大学法人 組織図



美術学部長・大学院美術研究科長 長谷高史 「これからの40年に向けて芸大リノベーション」

昨年40周年を迎えた本学は、今年4月に法人化され、一法人三大学（愛知県立芸術大学・県立大学・県立看護大学）に組織が変わりました。芸大には芸術教育・学生支援センター、芸術創造センターの二つのセンターが設置されました。芸術教育・学生支援センターは学生部機能を含む学生に対する教育全般の諸課題、諸問題に対応します。芸術創造センターは外部に対しての情報広報機能を含み、奏楽堂・芸術資料館もセンター組織に含まれます。また、少しでも芸大を理解いただくために、愛知芸術文化センターにおいて芸大サテライト講座を開催することになり、今年は40講座が実施されています。

このように様変わりをする芸大ですが、これからの40年を見据えた新たな展望を構想していかなければなりません。近未来的には大学キャンパス改築計画があります。今年度は基本構想、基本計画。20年度は基本設計、21年度は実施設計となり、早ければ平成22年度から工事が始まります。現在夏休みを返上して構想案の検討を施設整備委員会と大学法人本部で行っています。この構想案で新たなキャンパス計画が具現化されることにより、これまでの40年の蓄積を基礎とした新たな県立芸術大学が創造されると期待しています。

このキャンパス計画構想から次世代に向けた新たな取り組みも検討されています。昨年度からプロジェクト研究を大学研究の柱として位置づける試みを始めていますが、これを発展させ研究所構想へと進めています。また、学部や専攻の創設や改組も含めて芸大の将来像をどう新キャンパスに反映させていくかがこれからの大きな課題であり、早急に検討しなければなりません。21年4月には意願の大学院博士課程が設置されることから、現在大学院整備検討委員会で最終検討を行っており、20年度早々に文部科学省に設置申請を行う予定となっています。

大学の高度化への要請や少子化に対しての様々な施策を打ち出しながら、オンリーワンを目指し、愛知県立芸術大学のオリジナリティを世界に発信しなければなりません。

磯見学長を船長とした新たな船出に、学生、教職員が一丸となって芸大リノベーションを成功させましょう。

音楽学部長・大学院音楽研究科長 安元弘行 「芸大法人化後の課題」

法人化後、はや半年が経過しました。この間、教員はもとより大学当局、法人本部ともども未経験の環境の変化にとまどいいつも、諸問題の解決に向けてそれぞれの担当部署で果敢に闘っているという感じがします。特に新たに組織された芸術教育・学生支援センター、芸術創造センターでは、極端に少ないスタッフ数にもかかわらず、多くの重要かつ専門的な業務をこなさなくてはならない状況にあり、今後の重点的補完部署であると感じています。

この二つのセンターは本学の教育の中核を担う重要な組織であり、専門職スタッフの採用と十分な事務方の人数が必要であるとの認識を、大学当局はもとより法人本部にも強くアピールし、来年度に向けて迅速に対処すべきと考えております。現状が数年続くような事になれば“なんとなかっている”と判断されてしまうでしょう。

また、法人化移行にともなう予算措置の件では、大学院充実にともなう施設増設経費、施設の全面的建て替え構想、魅力ある大学創り予算、ティーチング・アシスタント、チューター経費、国際交流経費等々の新規予算が純増されていますが、ここ数年削減され続けてきた経常的予算の復活、補充は原則的には認められず、相変わらず教育現場での貧窮は改善されないままの状況が続くことと思われます。しかしながら、この辺で妥協できる事とできない事の明確な共通認識を再確認しておく必要があると感じています。その中でも、特に学生、教職員の身の安全と健康管理に支障をきたしているような事項（セキュリティ、空調等の環境整備）はなによりも優先して対処しなくてはならないと思います。

その他、数多くの懸案事項が進行中ですが、法人化、学内組織変更、施設改築等々、本学開学以来の激動期とも言えるこの時期、学生達に対して教育上、生活上の不利益をもたらすような事があってはならないのは言うまでもない事です。

芸術教育・学生支援センター長 細川 修 「芸術教育・学生支援センターの発足」

本年4月の法人化に伴い、大学組織が大幅に変わった。なかでも新しく二つのセンターが設置されたことが目新しい。センターといっても新しく箱ものが出た訳ではなく、私が所属する芸術教育・学生支援センターの実態は、スリム化した事務組織のメンバーと各種委員会の長による実働部隊の名称である。このセンターは大学全体の教育に関する企画・立案機能および教育改革推進機能を有し、学生の学習、大学生活、就職活動におけるきめ細かい学生支援を行うための機能を集約した組織である。

4月以来、芸術教育・学生支援センターでは臨床心理士の先生にお願いして学生相談室を設置し、学生の悩み相談に対応したり、就職ガイダンスを行った。

また教育改革推進にも取り組み、両学部の常勤教員を対象に「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究」(ファカルティ・ディベロップメント)についてのガイダンスを行った。本学のような芸術系の実技授業を主体とした学生数の少ない大学の場合、個人授業が中心になり、一般大学の授業形態と異なることから、成績評価や授業評価等、基準を統一することは難しい。今後、慎重かつ迅速に取り組まねばならない課題である。

平成22年には外部の評価機関に愛知県立芸術大学の現状および将来の目的等についての認証評価を受けることになっている。開学以来40年間に培ってきた愛知県立芸術大学の実績や成果と共に、授業内容の向上や魅力ある大学づくりに取り組んでいるか、社会に開かれ、地域や世界に貢献しているかを問われる訳である。芸術系の大学間で定期的に会合を持ち、意見交換することになったのも、実技系の特殊性を踏まえ、芸術教育について協調して社会にアピールすることが重要になってきた現れであろう。法人本部からも今後6年間に大学が取り組む中期計画が示されているが、多様な内容を見ると実現に向けて、これからまだまだ紆余曲折がありそうである。いずれにしても、今まで以上に教職員の皆さんの協力が必要不可欠になってきたと言える。

芸術創造センター長 天野武子 「芸術創造センターとは」

法人化に伴い、芸術創造センターは地域貢献(連携)の推進、国際交流の促進、広報活動の三つの役割を担い、より開かれた大学を目指し創設されました。夏休みに入る前に先生方には4ヶ月間の活動記録をご報告いたしましたが、センターには毎週運営委員会を開催し審議検討のうえ、ほぼ毎日のように情報グループの職員の方々との打ち合わせを必要とするほどの仕事量があります。

広報はPR戦略会議のもと広報委員会が再び立ち上がり、企画等はそちらの運営となりますが、折に触れサポートをしていきたいと思っております。

「芸大サテライト講座」事業も好調なスタートを切り、来年度の企画を立てる準備をしております。

センターの仕事として多くの課題を抱えておりますが、最も緊急な重要課題は国際交流であると思います。予算がないという理由で、大学としての国際交流を全くと言っていいほどやってこなかったことをなんとか打開しようと「アーティスト・イン・レジデンス事業」を立ち上げました。これは先生方からの国際交流に関するご提案を「アーティスト・イン・レジデンス」という事業に集約し、魅力経費理事長特別予算をいただくことで可能になりました。本来の意味の〈滞在型の芸術活動〉に加え、教育活動の拡充、地域との連携、大学のPR、そして国際交流の推進といったいささか欲張った内容を盛り込みました。

12月から5人のアーティストを招聘し、それぞれにアーティスト・トーク、ワークショップ、成果の発表等をしていただきます。地域との連携も積極的に行い、大学内の事業にとどまらない形で計画しております。

これを機にアーティストを通じ関係のもてる大学との交流をはかり、愛知芸大の国際化を是非とも推し進めてまいりたいと強く思っております。

実り多いセンターの事業になるよう最善を尽くしてまいりたいと思っております。

芸術資料館長・芸術創造センター 副センター長 小林英樹 「ぼくの夢」

●人になり(ぼくが館長に就任して)半年が過ぎた。小組織に結集した館長、学芸員、担当の事務員は、館長を除き、もてる力を最大限発揮し奮闘している。みなさんそれぞれ抱負はあるが、いざ実現の話となると口は重くなりがちだ。その前に、現実的な計画、予定、あるいは資料館としてやらねばならないことが山積している。

ここでは気分を変えてふたつの夢を語りたい。ひとつめは『ゴッホ展』。20××年×月開催。目玉は門外不出のロンドン・ナショナルギャラリーにある『一四輪のひまわり』。K館長の依頼を受けイギリス政府も異例の措置。日本で有名な『ひまわり』が見られるとあって、日本国民のみならずアジア諸国から訪れた人々まで集まり、普段はのどかな通学路もいまは長蛇の列。藤ヶ丘ではリニモ待ち時間1時間……。資料館展示室に、宮内庁秘蔵の若冲の動植物絵をずらりと並べたり、『ひまわり』『アノルフィーニ夫妻』(ファン・アイク)『モナリザ』『快樂の園』(ボス)やデューシャンのガラス絵を展示してみたい。

つぎに、たとえば『フィレンツェ〜大名古屋展』のようなもの。類例のない発展を遂げた実利優先の新都市、名古屋。名古屋はこと創造性ある文化のことになると悲観的に語られることが多いけど、逆手にとって名古屋でなければ生まれてこないような爆発ではじけたい。「乾いたこの地」から咲く花は一体どんな色かたちをしているのかわからないけど、ぼくの内側にあるこだわりはことによると名古屋での爆発を待っていたのかもしれないと最近感じることもある。こっちの方は、地元名古屋人、いや、愛知芸大生が中心に爆発すればいいだけだから、実現の可能性ははるかに高いし、ぼくが館長をしている間にやればやりたい企画である。旗手になれるのかしんがりを任されるのか、ぼくはとにかく頑張りたい。

附属図書館長 森田義之 「図書館の『新時代』— 芸術研究の知と情報の拠点として」

大学創立以来40年が経過し、ようやく本図書館も、従来のアナクロニズムの状況を脱して、新しい時代に入ろうとしている。

●年度から、法人化にともない、長年の悲願であった開館時間の夜8時までの延長が実現することになった。創立以来一度も変わることもなかった「5時閉館」というのは、全国の大学の中でも異例中の異例であったが、ようやく他の大学図書館並みになったわけである。しかし、遅ればせながらとはいえ、この改善の意義は非常に大きい。

学生諸君には、あらためて図書館を芸術研究の「知と情報の拠点」として認識しなおし、大いに、積極的に、活用していただきたい。さもないと、単なる光熱費の無駄使いになってしまう。

もう一つの大改革は、図書館システムの導入である。現在は、貸出返却のみがシステム上で行える状態になっているが、所蔵資料書誌データの入力には3年計画で進行中であり、21年度に完成すれば、すべての所蔵資料が学内外のパソコンから検索できるようになる(これも全国ほぼすべての図書館ですでに設置が完了していることだが)。また今年度7月よりオンライン・データベースが導入され、特に卒業論文、修士論文のための文献の検索が画期的に便利になった。

施設面での改善の課題は多々あるが(たとえば、利用頻度の高い画集、全集、辞事典、カタログ等の大幅な開架化、空調設備の改善、視聴覚室のリニューアル、学生自習室の設置、等々)、もう一つの大きな課題は、芸大の教育・研究のレベルを維持し発展させるために、図書のコンスタントな購入をどう確保していくかという問題である。

この10年来、大学予算全体の縮減にともない、図書購入費もドラスティックに削られてきており、すでに2005年度の段階で、東京藝術大学の購入冊数6391冊に対し、本学の購入数は818冊という落差だった。ところが、今年度はさらなる大幅ダウンとなり、この状態では、専門研究書や外国文献はおろか、どこの芸術系大学の図書館も所蔵しているような、一般的な音楽書・美術書(特に学生のための)の購入もままならないことになる。

予算の獲得については、八方手をつくして何とか努力したいと考えているが、学生諸君に責任はないのだから、購入してほしい本があれば図書館スタッフまで要求してほしい(購入希望カードが館内に用意してある)。

開館時間延長でだいぶ風通しはよくなったものの、問題は山積している。それでも、緑あふれるキャンパスを眺めながら、読書と思索にふけることのできるうちの図書館はすばらしい!

油画専攻客員教授 歌田真介



絵画は、物質（油絵具やカンバス）に支えられた芸術だ。たとえば、油絵具は、1、粘りが強く、乾きが遅い。2、透明、半透明、不透明に使える。3、乾燥後、光沢があり緻密な塗膜を形成する。この物質としての特徴と表現を高い次元で統一して成り立つ。この原則に照らして明治以来の洋画を振り返ってみよう。

明治前期の画家は、この特色を生かしながら表現しようと努力した。然るに、明治後期の黒田清輝以降は表現を重視し、技法材料の研究を軽視して油絵具の特色を殺して使用する時代となった。東京美術学校には技法、材料研究セクションは無かったのである。そのため緻密なマチエールの作品は少ない。両者の差異と問題点を講義で明らかにする。

ちなみに、東京芸大の『油画技法・材料研究室』は1950年代に開設、研究が軌道に乗ったのは1980年代以降だ。基礎的情報を集めて研究するには、人、場所、予算があったとしても時間のかかるものである。創立40年を迎えた本学に無い。無くて平気な神経を私は理解できない。

芸術学専攻教授 熊田由美子



海も山も近い自然環境と都会性、東と西からの文化の流入—愛知の地域個性を、この頃ようやく面白いと感じ始めています。今春まで東京藝術大学の奈良にある研究所で、豊富な名作を目のあたりにしつつ美術史（主に仏教美術史）研究を行ってきました。その「地の利」を離れた欠落感は、滝山寺（岡崎）の運慶作品、七寺（名古屋）菩薩坐像をはじめ、東海地方の数々の名作に再会するたのしみや未知の作品に出会う期待へとかわりつつあります。隣の三重県指定文化財の選定になが年かわり、地域文化の古層に息づく作品群を見出すことに興味をもったことが、今回の転任を後押ししたといえるかもしれません。

住み心地のよい愛知には永住する若者が多いと聞きます。古文化財の研究と保存・活用に貢献できる人間、古典と対峙しつつ多様な創造活動に踏み出せる人間が、この大学、この地から一人でも多く育つように、設備環境の不備にもめげず、努めたいと思います。

デザイン専攻准教授 今尾泰三



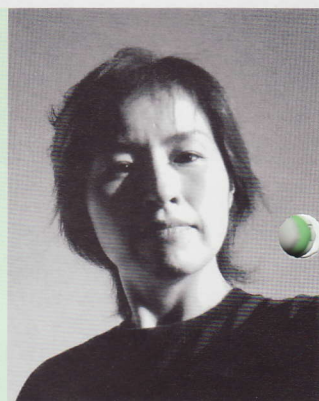
運命とは誠に不思議なものだ。自分が望んだ事ながら、私にとって愛知芸大の教員になると言う事は正に「青天の霹靂」でした。

芸術とデザインの道を志してからずっと、泥沼の中で、もがきあがきながら何とも不可思議な道を歩き続けている最中です。しかし不思議な事にイザという時に運命の女神様が私の側に来て、いつも随分お世話になっているのです。

私の好きなお話で、ある所に人を拒む深い谷を持つ険しい山があり、ある人がそこに行きたいと言いだし、人々は止めたが、その人は山を目指し、行ってみると前日に吹いた大嵐のため巨大な樹が倒れ、橋となって谷に架かり、その人は山に辿り着いた、という単純なお話です。

諦めず、夢を見、トライし続けようではありませんか。皆の衆。

デザイン専攻准教授 森真弓



学びの壁に守られていた頃、毎日が学習—発想—展開—気づきの連続で、悩みや行き詰まりの中でもどこかワクワクしていました。デザインとは「人が、人として、人の為に考える」…何もないところから中庸の心眼をもって「必要」を見極め、最良の結果をもたらす仕事…そう強く思いこの職についています。

思想や価値観、環境が日々刻々と変化している世の中であっても、デザイナーの役割は何ら変わることはありません。そして分野が多岐に渡り活躍する現場は広がっている反面、より高いレベルが求められてきています。

混沌とした情報社会の中で、表面的なことに惑わされず、本質を追究し続けられる「軸」を持つことの大切さを、しっかり伝えていきたいと思っています。

陶磁専攻准教授 梅本孝征



私が陶芸に携わるようになってから二十数年になりますが、その技術の習得と自分の目指す作品を追求して試行錯誤を繰り返し、故藤本能道氏(色絵磁器で重要無形文化財保持者、東京芸術大学元学長)と身近に接することが出来た事から自らの制作の方向性を確かにすることが出来ました。その間、工芸教育の現場を八年余り経験しましたが、学生の頃には反撥すらしていた同氏の教育理念が、今は確かな考えだと思うようになりました。同氏の作家としての紆余曲折を知るにつけ、その思いは更に深くなりました。

基本技術の習得と創造性は必ずしも一致するものではないですが、創造性を具現化するには、その習得は欠かせないものです。学生の方には創作に対する深い悩みと大いなる希望を持って欲しいので、そうなるべく工芸教育に携わりたいと考えています。

油画専攻准教授 井出創太郎



昨年は湘南のアトリエで作品を作り時々自転車で息子と江ノ島に出かけたりしていました。今年は長久手の山で作品に向かっていきます。

昨年立ち上げた松山に建つ重要文化財渡部家住宅での展覧会は、今年、第二期を迎え、銅版画の襖と障子は84枚になりました。来期、家屋に宿る銅版画は130枚を越えるものとなります。そして、廃版で作る銅の茶室(根室落石岬)、正覚寺銅版画計画(大阪)へと銅版画の居所を求める旅は続いてゆきます。学生だった頃、師の制作をみつめ、作品の大きさと深遠さに、そして創り出し求めて行くことへの圧倒的なエネルギーに触れたことはまさに血肉のついた情報となり、苦しい時の支えと道しるべになりました。師は丁度今の私の年齢でした。創作と立ち上げの現場が、そこに携ってくれ、支えてくれた者に何物かを宿してくれればと、そう衷心から思っています。

油画専攻講師 大崎宣之



大阪生まれ。大阪育ち。学生の頃に京都に下宿し、大阪、京都と転々としながら今までの人生を関西で暮らしてきました。愛知芸大に赴任してようやく半年。学生の頃に四芸祭で愛知芸大にきた時に感じた「なんか山を開いたでっかい大学やなー」という印象そのままに自然豊かなこの大学は、官舎の脇に生えている「ごごみ」を食したり、夜中に狸と遭遇したりと様々な楽しみをもたらしてくれます。

さて、僕は学生時代には版画を学び、絵画や写真、オブジェや映像と様々な方法を用いて創作活動を行ってきました。そんな僕が油画専攻版画分野の教員になりどのような教育が出来るのか?と自問自答している毎日です。自己表現を投影する素材、方法を特定せずに自由に振る舞い続けるためこの不可解な「版画」というメディア性に着目してきた僕は、今の所「何を表現するのか」の「何を」を共に語りながら「新しい世界」を見る環境を作ることが僕の教育であり、使命ではないかと思っています。

作曲専攻教授 久留智之



前任校の広島大学では、教育学部という性格上「教科教育としての音楽」や「生涯学習としての音楽」の立場から音楽にアプローチしていました。愛知にきて一番の違いは、ここで扱われる音楽が「芸術としての音楽」であるということです。いま日本で音楽は溢れていますが、この「芸術としての音楽」に関する限り、それほど隆盛を極めているという状況にはないでしょう。ましてや、その新たな創造である「作曲」ということになると、一般社会の認識外といってもよいかもしれません。しかし、それなくしては「伝統」もやがて衰退してしまいます。ここ愛知で作曲を通して学生たちとともに社会と関わり合いを持ち、少しでもこの「芸術としての音楽」を活性化させることができたらと思っています。

●学生自治会の結成に向けて

学生の皆さん、充実した学生生活を送っていますか？

例えば「作品制作を十分に行えるスペースが無い」「湿度と温度の管理がなされていないので、楽器の状態が気になる」など、誰もが快適な学生生活・研究活動を行うための要望や現状への不満を持っていると思います。このような学生の声を大学運営に反映させるべく、今夏、両学部有志学生によって、『愛知県立芸術大学学生自治会準備会』が立ち上げられました。そして、本会の発足に伴い、愛知県立芸術大学の学生の皆さんは全員が本会の会員となりました。

学校教育法は、第五十二条で“大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする。”と定めています。大学が学術の中心機関として担う役割を果たし、発展していくためにも、私たち学生の声が必要なのです。

長い間、愛知県立芸術大学には学生による自治組織がありませんでした。しかし、法人化という大きな変化を迎えた今だからこそ、私たち学生も積極的に行動していかなければならないのではないのでしょうか。

学生自治会準備会会長
ピアノコース大学院2年 大山宮和瑚

●大学への小さな提言

愛知県立芸術大学に望みたいのは、美術学部のアトリエについて、授業（講義）に関することです。

授業については、今は写真や映像を作品媒体にしている学生も多いので、写真・映像関連のものはデザイン専攻だけでなく、他の専攻の学生も受講できるようにするべきだと思います。また、共通教育科目にも、写真論や映像論、映画論のような講義を取り入れてほしいと思います。

美術学部のアトリエは狭すぎます。芸術祭について、「芸術祭なのだから、模擬店よりも展示や演奏に力を入れるべきなのでは」という提言が大学側からなされますが、展示できるスペースが少なすぎて展示を断念する場合があります。何とか場所を確保しようとしても、一部屋を多人数で使用しているという状況のために、アトリエを展示スペースにすることは難しいのです。「芸術祭だから」と言われても、大学側の受け入れ態勢ができていません。土地は多くあっても、学生は普段から狭いアトリエの中で制作しているのです。

油画専攻3年 山口理菜



学生自治会準備会の面々

●なぜ今、自治会なのか

今年度から愛知芸大が公立大学法人化し、大学内の至るところで様々な動きが見られ、より活気を感じられるようになりました。私たち学生もこの春から「自治会」を立ち上げようと活動を行っています。今年度いっぱい準備団体とし、来年度4月より本格的に自治会として運営を行う予定です。

まず、私たちは、学生が主役となる大学を目指しています。そのためには学部・専攻という隔たりを越え、「愛知芸大の学生」として一つのまとまりを持つことができる機関があるべきだと考えました。

現状で考えている自治会の役割としては、主に二つあります。一つは今まであった機関（芸祭委員、クラブ等）を整理すること。自治会が代表してまとめることで学生同士の交流の活性化を図ります。もう一つは個人では解決できない場面、問題解決のために行動することを考えています。例えば現在、学生が大学の設備やシステムに提案を行いたいとき、大学にそれらを伝える仕組みが整っていません。自治会は学生の意見を集約し、それらをまとめる役割を果たします。意見を交換しやすい環境を整えることで、学生が主体的になり大学自体の活性化に繋がる、ということが起こるのではないのでしょうか。

運営は学生からのアンケートなどをもとに問題解決を行い、また自治会は専攻間の垣根を取り払えるような存在だと考えているので、話し合いを持つ機会を増やしていくことも視野に入れています。

ゼロからの立ち上げになるため、今の段階では全くの手探りの状態です。私たちは、より積極的に学生の参加を求めています。また、大学に関わる方々のご理解無しには成立することはできません。皆様に暖かく見守ってくださるよう、よろしくお願い申し上げます。

デザイン専攻3年 橘健太

●大学生活に学生の声を反映してほしい

音楽学部の方々が自治会設立に動き出したのを機に、美術学部でも自治委員を集めるべく各専攻の学生に呼びかけました。各専攻に代表を、各学年に連絡委員を置き、準備委員会としての形ができました。

自治委員の活動は、学生の意見・要望を取り上げ、大学側と交渉することです。長年自治会が存在しなかった本学は、学生側と大学側が意見を交換する機会もなかったのでは、と思われます。また大学生活の中、作品制作をしていくうえで、大学側に対し「もっと設備が良ければ制作効率が上がるのに」と意見したくとも、どのように動けば大学が変わるのかわからずに、現状を受け入れざるを得なかった人も多いと思います。

夏休み前、各専攻ごとに「大学にどうなってほしいか」というアンケートを取りました。私が在籍する油画専攻では「空調設備を整えてほしい」「アトリエを大きくしてほしい」「アトリエの利用可能期間を拡大してほしい」「窓に網戸をつけて作品に虫が張り付かないように」…など、想像した以上に多く、様々な意見がありました。夏はむせかえるような暑さの中、冬は凍える寒さの中で、現状の設備で制作活動をしていくには、過ぎ易いとは言い難い状態です。学生皆が、大学側に何らかの意見や要望を持っていることがわかります。より良い大学生活を送るには、現状を知り、学生全体で動くことが大切です。学生の要望の実現をすすめ、学生から出た声を全体に発信していく本自治会では、皆さんの協力が不可欠です。他大学では、自治会を通して学生の声が反映され、成果を得た例が多くあります。大学と交渉ができる唯一の機関として、皆さんにも有効に活用していただきたいと思います。

油画専攻3年 江上真織



■フランスで制作を始めて

私は愛知芸大を卒業してからすぐにフランスへ来て、作品制作を続けています。学部2年生の時に一度旅行でフランスへ行き、是非また来たいと思い、住むことになりました。日本で制作していた大学時代と今とでは(学生でなくなったのもありますし)、周囲の状況がだいぶ変わりました。それに伴って、作品に対する自分の姿勢も変わってきたのではないかと考えています。そんな中で、私が今一番心掛けている事は、自分の表現したい気持ちを盛り上げていく事で、その為に、街へ散歩に出たり、新旧多くの作品をみに行ったり、自分と同じように作品を作っている人に会いに行ったりなど試行錯誤しています。そして、その上で何よりも難しい事が、実際に“つくる”ことで、粘り強く続けていきたいと毎日思っているのですがなかなか思うようにいきません。生活の中で自分が吸収するものを出していく、表現していく、行動に移していく、つくってみる…ということがこんなにも大変なのかということをつくづく感じながら、それでも今はあまり結果を考えずに、“つくる”ことをしっかりとできるようになることを目標に、日々丁寧に生活していきたいと思っています。

2007年大学院油画専攻修了 末むつみ

■学生からプロ奏者へ

2007年2月、県芸卒業を目前に控えたこの時、私は名古屋フィルハーモニー交響楽団の入団試験を受けました。合格するわけ無いと思っていたのにまさかの合格。自分自身が一番驚きました。5月半ばから3ヶ月間の第3次試験(試用期間)を経て、9月1日から正団員となりました。

プロの楽団は学生の時からは想像もつかないような数の本番が次から次へと迫ってきます。本番の数は最低でも週に1回、大体ひと月に10回以上。そしてリハーサルは多くて3回。少ない時はリハーサル無し、当日のゲネプロのみ。その中でもお客様に納得して頂ける物を提供しなければならないのがプロというもの。

名フィルでの経験はまだ数か月しかありませんが、これまでに数々の本番を経験し、多くの指揮者やソリストを見てきました。彼らの確立された個性や音楽に対する信念など、この数か月で彼らから受けた刺激は計り知れないものがありました。そんな彼らをすぐ間近で見られる今の職場は、私にとって最高の環境です。学生時代には先生方はもちろん、かけがえのない仲間や先輩・後輩にも恵まれ、毎日とても充実した日々を送っていましたが、今僕が経験していることは現場でしか得ることができない貴重な財産だと思っています。

これから先も数々の経験を積み勉強を続けていくことには学生時代と何ら変わりはありませんが、県芸で学ばせて頂いた音楽家としての基礎や初心を忘れることなく、更に上を目指して少しでも良い音楽家になれば、と思っています。

弦楽器コース(ヴァイオリン)38期生 米田誠一

■ジュネーブ音楽院に留学して

県芸を卒業後、スイスのジュネーブ音楽院のピアノ科に3年間留学しましたが、新しい環境の中で様々なことを学びました。その中でも印象深いのが、音楽への取り組み方の違いです。私は最初、限られた留学期間を無駄にしまいと、日本での様にピアノの練習ばかりしていました。しかし、ヨーロッパの学生達は練習する時は一生懸命やり、休む時は思い切り休み、音楽に向き合う為に精神面を上手にコントロールしているようでした。先生からも、楽器を練習するだけではなく、旅行や美術館へ積極的に出かけて心を豊かにすることが大切だと教えていただきました。それを心掛けるうちに精神的な余裕が生まれ、自分の中から湧き上がる感情を自由に演奏で表現できるようになってきたと思います。

そして、室内楽を通しての幅広い経験も、今のピアノ演奏に繋がっています。音楽院の授業以外に仲間とグループを結成し、音楽祭やコンサートに定期的に出演したこと、プロの演奏家との共演やパリやリヨンへの演奏旅行、ジュネーブの伝統あるホールでの演奏など、すべてが刺激的で、新しい音楽を開拓していくようでした。また、現代作曲家の作品の初演を任された時は、作曲家から直接演奏の指導を受け、楽譜からだけでは伝わらない作曲家の熱意や性格をも組み込んだ演奏ができ、とても貴重な経験となりました。

今後は、今まで学んだことを生かし、人種や国の壁を越えた音楽活動をしていきたいと思っています。

2003年器楽専攻ピアノコース卒業 多賀絵理



愛知県立芸術大学

サテライト講座

愛知県公立大学法人中期計画の「地域連携推進」の一環として『芸大サテライト講座』がもたれています。準備期間が短く、十分議論を深められないままの見切り発車的な要素があったことも否めませんが、有志のご好意に支えられてどうにか初期の目標数40講座を開催することができました。受講者のアンケートなどから、講師の方々の独自性を発揮したユニークで充実した講座が展開しているように思えます。一年目の結果をきちんと総括し、来年度に生かしたいと考えていますが、すでに講座数を決めなければならない段階に差しかかっています。サテライト講座はあくまで教員の自発的参加のうえに成り立っています。来年度も、今年度同様40講座を行うことを決めましたので、よろしくご協力のほどお願いします。

芸術創造センター運営委員会

A 美術座学シリーズ

講座名	講師名	日時
フィンセント・ファン・ゴッホⅠーオランダからパリ	小林英樹	9月6日(木)
フィンセント・ファン・ゴッホⅡーアールル	小林英樹	9月13日(木)
フィンセント・ファン・ゴッホⅢーサン・レミ	小林英樹	9月21日(金)
フィンセント・ファン・ゴッホⅣーオーヴェル	小林英樹	9月28日(金)
日本画の表現	松村公嗣	10月6日(土)
染付けの話と方法	太田典典	10月13日(土)
復元模写と現状模写	秦誠	10月14日(日)
ドイツの現代美術館	竹内孝和	11月16日(金)
アノミクスデザインとプロダクトデザイン	友岡秀秋	12月8日(土)
消費者から生活者へ「デザインを観る視点を変える」	中島聡	12月23日(日)
色絵陶磁あれこれ	梅本孝征	1月12日(土)
マイセン窯に始まるドイツの磁器産業とデザイン	長井千春	1月27日(日)
石と彫刻	大塚道男	2月22日(金)

B 自作を語るシリーズ

講座名	講師名	日時
自作を語る～もう一つの知性としての絵画	設楽知昭	10月3日(水)
私の彫刻研究	佐藤勲	11月29日(木)
私と陶磁器デザイン	川村秀樹	12月16日(日)

C 制作シリーズ

講座名	講師名	日時
漢字を描こうⅠ	白木彰/佐藤直木	8月19日(日)
漢字を描こうⅡ	白木彰/佐藤直木	8月19日(日)
「イメージの皮」Ⅰーフロッタージュを用いた共同制作	大崎のぶゆき	10月20日(土)
「イメージの皮」Ⅱーフロッタージュを用いた共同制作	大崎のぶゆき	10月20日(土)
美術の世界Ⅰ「オブジェってなに？」	神田每実	10月21日(日)
美術の世界Ⅱ「線のお話し」から...	神田每実	11月11日(日)
写真によるカラーシュ	今井理郎	11月24日(日)
時を写すキューブⅠ	井出創太郎	1月13日(日)
時を写すキューブⅡ	井出創太郎	1月13日(日)

D 音楽座学シリーズ

講座名	講師名	日時
ピアノを学ぶ人達の為にⅠーC.ツェルニーはどう練習すべきか。	牧野纈	9月20日(木)
ピアノを学ぶ人達の為にⅡーJ.S.バッハを練習する意義は。	牧野纈	11月30日(金)
ピアノを学ぶ人達の為にⅢーコンクールは必要ですか？	牧野纈	1月31日(木)
音楽学の楽しみⅠー中国音楽のイメージの形成・受容・継承を考えるーメディアが伝えた中国音楽	増山賢治	11月2日(金)
音楽学の楽しみⅡーチャイコフスキーの虚像と実像	安原雅之	11月9日(金)
ピアニストの手の動きー筋電図データによる解析ー	掛谷勇三/石垣享	2月2日(土)

E 公開レッスンシリーズ

講座名	講師名	日時
公開レッスンシリーズⅠーピアノー演奏の楽しみ・音楽の楽しみーオリジナル・ピアノ・レッスン	北住淳	8月26日(日)
公開レッスンシリーズⅡー声楽	二神二朗	8月26日(日)
公開レッスンシリーズⅢー管楽器	原田綾子	8月27日(月)
公開レッスンシリーズⅣー弦楽器	白石禮子	8月27日(月)

F 室内楽シリーズ

講座名	講師名	日時
弦楽四重奏の響きに魅せられて	天野武子	2月9日(土)
弦楽器アンサンブルの「ミョウ(妙)」	福本泰之	2月16日(土)
ヴァイオリンとの出会い、そして室内楽...	岡山芳子	2月23日(土)
木管室内楽の変遷	村田四郎	2月29日(金)

G 芸術文化センターとの共同企画シリーズ

講座名	講師名	日時
オペラ制作生みの苦しみと喜び	大下久見子	10月26日(金)

『フィンセント・ファン・ゴッホⅠ～Ⅳ』

わたしは市民講座のようなものが好きだ。なぜなら、何をやるかがわかったうえで受講料を払ってまで受けようとする人々の気持ちも伝わってくるからである。それは室内を暗くしスライド上映を始めても居眠りもせずに映し出された画像を見つめ、私の話に耳を傾ける人々の表情からも伝わってくる。大学の授業を一般市民にと銘打ちながら、正直わたしの場合はサテライト講座の内容や雰囲気は明らかに大学の授業以上のものになっている。受身がちの学生たちはこの真剣な空気を知るべきだろう。わたしはサテライト講座を自分の本領が発揮できる場、すなわち自己表現の場として楽しんでいる。ゴッホの作品に深く触れ、絵画鑑賞を愛する人々が一人でも多く現れることを期待している。

美術学部油画専攻 小林英樹

サテライト講座「漢字を描く」

第1回目のサテライト講座は、「漢字を描く」をテーマに白木と佐藤講師の二人で実技中心の授業をおこなった。受講生は、小学生から70代ぐらいの幅広い方々が受講された。

漢字の起源の講義では、漢字は絵であることが理解され驚きと納得の声が「へえー」「合点、合点」。私たちの講師の課題は、大学院レベルの演習をいかに小学生に理解させるかである。専門用語を使い、難しい話をするのは簡単だが、それをわかりやすく平易に話すことが求められた。

演習前半は漢字の起源である甲骨文字を3500年前の気分になって彫で板に彫りこむ体験をしてもらい、後半は漢字の成り立ちを絵にして色紙に描いてもらった。受講料に見合った講談かどうかは不明だが、ボケの私に対して佐藤講師のフォローが絶妙で、漫才としては「木戸銭を返せ」のヤジは飛ばず、前座の高座は「お後がよろしいようで」と、お囃子とともに幕をおろした。

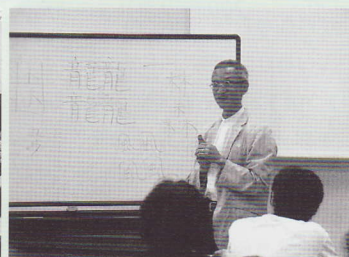
美術学部デザイン専攻 白木彰

「サテライト講座・公開レッスン」を終えて

本年8月27日、愛知芸術文化センターとの連携事業「サテライト講座」「公開レッスンシリーズ」の一環として、「県立芸術大学における実技系の音楽授業内容を一般に公開する」をテーマに、学生2名に対しヴァイオリン実技レッスンを行いました。1時間半と限られた時間であったが、最後は少々駆け足になってしまった事、それにも関わらず終了時間をややオーバーしてしまった等、個人的には反省点もありますが、様々な年齢層の方々が聴講下さり、「とても興味深い内容だった」「大変勉強になった」等のお言葉も頂きほっとしております。

今後同シリーズを継続する場合、このイベントをより良いものとする為に気付いた提案を挙げてみます。まず、今回はセンター側の事情もあり企画決定から開講までの時間が短く、受講生を本学の学生のみに絞る事になりましたが、学外の方に更に興味を持って参加頂く為には一般からの受講生を募ること、また、より企画に合った会場を確保すること(今回使用した大リハーサル室は広すぎる上、音響的にもあまり良いとは言えない)、その他、聴講なさった方から「PR不足で勿体無い」とのお叱りも頂戴しました。早い時期からの入念な準備と、より効果的なPRで門戸を広げる事が大切ではないでしょうか。

音楽学部器楽専攻弦楽器コース 白石禮子



小林英樹講座風景(上)

白木彰講座風景(右上)

白石禮子講座風景(右下)

デュッセルドルフ美術大学、CIAMとの交流はじまる

芸術創造センター副センター長・芸術資料館長 小林英樹

本大学は海外提携大学が南京芸術大学を除いてない。これは昨今の大学に例を見ないものである。芸大にも世界的視野に立ち、世界を舞台に活動できる学生を多く輩出することが求められているとすれば、海外交流、大学間の提携が急がれるのは明らかである。

今回、彫刻専攻の竹内孝和先生と資料館学芸員の林育正さんのご尽力もあり、ベルリン芸術大学とデュッセルドルフ美術大学の学生のドローイング展「線から場へ」が無事実現した。展覧会としては小規模のものではあったが、これは本大学にとって記念すべき第一歩になった。作品展は個性的表現が目立っていたし、質的にも充実感があつた。

また、ルフトハンザ・ドイツ航空の協力により、デュッセルドルフ美術大学の事務総長、兼教授でもあるピーター・M・リューネン氏の招聘が実現、さらに本学卒業生の奈良美智、杉戸洋の展覧会をドイツで企画した気鋭のキュレーター、ドリス・クリストフ氏(協力:国際交流基金)、NPO法人として国際交流活動を行うアーティスト、藤井隆也氏が参加。資料館演習室には心地よい熱気と緊張感が走った。司会役を陶磁専攻の長井千春先生が引き受けてくれたが、鋭く問題の核心に迫る流れが生まれた。

リューネン氏はデュッセルドルフ美術大学で学ぶ外国人学生の実態やその受け入れ態勢などを紹介してくれた。建前だけの大学間交流話は排除し、転入学、休学しての聴講制度など有益な挑戦の仕方を助言してくれた。形式よりも内容、確かに、中途半端な気持ちで外国に行ってもただ無駄であろう。わたしたちも提携校数に惑わされず、まず、実質的内容を深める方策を研究しなければならないことが明確になった。

リューネン氏はデュッセルドルフ美術大学の事務総長であり、CIAM (Center for International Art Management※)の長でもある。シンポジウム終了後には学長室で、学長、リューネン氏、藤井氏、芸術創造センター長、竹内先生、それにわたしの6名で歓談。話の流れのなかで、彼は招待されたことに感謝し、愛知芸大と「今後も友好関係が遂行されていくことを願う」という主旨の公式文書を書き残してくれた。さらに、帰国後3日間CIAMにおいて「大学間交流」について会議を開き、愛知芸大に対しては今回の実績を基に「次へのプロジェクトにつなげたい」という内容の手紙をいただいた。

これは、今後の友好関係をお互いが追求していこうというもので、デュッセルドルフの美大と音大、ケルンの美大と音大と本大学の友好的交流の第一歩である。翌日、再び学長室でCIAMの国際的アートマネージメントプログラムに関してリューネン氏と芸術学専攻の森田教授、小西准教授、音楽学専攻の安原准教授との協議が1時間にわたっておこなわれた。



「東海地方ゆかりの作家たち」展開催

芸術資料館学芸員 林育正

5月16日(水)から31日(木)まで、本学芸術資料館で「収蔵資料展—東海地方ゆかりの作家たち—」を開催しました。

本学の芸術資料館には絵画、彫刻、工芸品、楽器など約1300点が収蔵されています。これらの一部を学内外に公開し、県民の財産でもある収蔵品の利活用を促進することを目的として毎年催されるのが「収蔵資料展」です。

今年は「東海地方ゆかりの作家たち」を大枠のテーマに、地域を代表する作家の作品、本学で指導にあたられた先生方の作品、本学を巣立ち国内外で活躍する卒業生の卒業・修了制作作品など55点をピックアップし、館内に展示しました。

ロビーでは島田章三作《かたちびと89》や戸谷成雄作《器3》など、「ヒトのかたち」をテーマに、アーティストによって表象される「ヒト」の姿をめぐって、時間を越えたそれぞれの取り組みを紹介しました。第一展示室では、伊藤廉、高橋洋ら歴代教員の作品、昨年度退官された清塚紀子、そして本年度から就任された井出創太郎の卒業・修了作品などで構成し、大学教育を支える礎としての教員作品を紹介しました。第二展示室はデザイン部門に特化し、メディア、プロダクト、スペース、グラフィック等、それぞれの分野の優れた卒業生作品と、指導にあたられた教員の代表作で構成しました。そして特別展示室は日本画と陶芸の作品で構成し、本学における東洋的な美意識をその伝統の中に見出す空間と位置づけました。

今回の展示の特徴は、作品の空間的な構成と、卒業生作品の紹介に力を入れた点です。中でも軍艦島の写真集で知られる写真家、雑賀雄二の卒業制作《キリシタンの島々》(1975)は、本学を写真で卒業した最初の学生作品でもあり、テーマ、技術ともに極めてレヴェルの高いその作品は、訪れた観客の強い関心を集めていました。



雑賀雄二 《キリシタンの島々》より

資料館演習室におけるシンポジウム

※CIAM ノルトライン＝ヴェストファーレン州の4つの芸術大学(デュッセルドルフ美術大学、デュッセルドルフ・ロベルト・シューマン音楽大学、ケルン音楽大学、ケルン・メディア美術大学)間の協定に基づき、2005年に組織されたアートマネージメント・プロジェクト。

- 04/01(日) 愛知県公立大学法人発足(理事長清水哲太)
- 04/02(月) 第1回理事会
- 04/05(木) 入学式・ガイダンス
- 04/06(金) 豪ピクトリア州首相府芸術課マネージャー マイケル・ネイション氏来訪
- 04/09(月) 前期授業開始
- 04/17(火) 法隆寺金堂壁画模写展示館春季展
～05/31(木)
- 05/16(水) 収蔵作品展—東海地方ゆかりの作家たち—(芸術資料館)
～31(木)
- 05/23(水) 愛知芸術文化センター(AAC)を拠点とする芸術文化振興のための集い
- 05/24(木) 四芸術大学体育・文化交歓会(京都市立芸術大学)
～27(日)
- 06/21(木) 豪ピクトリア州政府 スチュアート・クープ氏来訪
- 06/23(土) 芸大オーケストラ春季特別演奏会(豊川市文化会館)
- 07/25(水) オープン・キャンパス(美術学部)
- 07/26(木) オープン・キャンパス(音楽学部)
- 07/27(金) 公開講座(デザイン専攻)
～28(土)
- 07/30(月) 前期授業終了
- 07/31(火) 公開講座(陶磁専攻)
～08/04(土)
- 08/10(金) アートインパクト及び芸大サテライト、オープニングイベント(愛知芸術文化センター・アートスペースA)
- 08/19(日) 「サテライト講座」開始
- 09/16(日) ポピュラークラシックコンサート(奏楽堂)
- 09/18(火) 法隆寺金堂壁画模写展示館秋季展
～10/31(水)
- 10/01(月) 後期授業開始
- 10/10(水) 芸大オーケストラ第40回定期演奏会(愛知芸術文化センター・コンサートホール)
- 10/11(木) 芸大オーケストラ第40回定期演奏会(愛知芸術文化センター・コンサートホール)
- 10/16(火) 特別展—仏画の世界—(法隆寺金堂壁画模写展示館)
～10/31(水)
- 10/16(火) 第33回美術学部教員展(芸術資料館)
～10/28(日)
- 11/02(金) 第1回国際交流企画「線から場へドイツ若手作家ドローイング展—」(芸術資料館)
- 11/02(金) シンポジウム「場から線へドイツの芸術教育、そして愛知芸大との国際交流を繋ぐもの—」(デュッセルドルフ大学ペーター・ミヒャエル・リューネン教授を招いて)

展覧会・演奏会日程

芸術資料館の催し

開館時間: 10:30～16:30(入館は16:00まで)

佐藤勲教授退官記念展

11月23日(金)・・・12月4日(火)

留学生・研究生作品展

12月7日(金)・・・12月14日(金)

デザイン専攻作品展

平成20年1月8日(火)・・・1月16日(水)
休館日/14日(月)

卒業・修了制作優秀作品展／研修生作品展

平成20年1月19日(土)・・・1月29日(火)

法隆寺金堂壁画模写展示館の催し

開館時間: 10:00～16:00(入館は15:30まで)

法隆寺金堂壁画模写秋季展

11月16日(金)・・・11月30日(金)
休館日/18日(日)・19日(月)・26日(月)

演奏会のお知らせ

オーケストラ特別演奏会

11月18日(日)
会場: 豊明市文化会館

管弦楽団第18回定期演奏会

11月20日(火)
会場: 愛知県芸術劇場コンサートホール

地方自治法施行60周年式典

11月21日(水)
会場: ウィルあいち

第8回ウィンドオーケストラ定期演奏会

11月28日(水)
会場: しらかわホール

オペラ公演

12月8日(土)・9日(日)
会場: 長久手町文化の家 森のホール

金管室内楽のタベ

12月11日(火)
熱田文化小劇場

ピアノ名曲のタベ

12月12日(水)
名古屋市中川文化小劇場

弦楽合奏のタベ

～岡山芳子退官記念コンサート～
12月18日(火)
会場: しらかわホール

打のとき(打楽器専攻学生による)

平成20年2月22日(金)
会場: 長久手町文化の家 森のホール

第39回卒業演奏会

平成20年2月27日(水)
会場: 愛知県芸術劇場コンサートホール